

# 小説「妄想卿」

天津孔雀



(一)

青年は何処までも漆黒に暮れた夜の中を歩いた。

琥珀色（セピア）に散らばる蟬の羽、人の心の情熱も晩夏の日差しに灼き尽くされて、今ではひとえに色褪せるのみ……。

月は遠くに赤く滲んで、華やかに暗紅の薔薇を浮かべた戀の惨劇の後の血溜りのよう。星々は眠りを失って、いつまでたつても完結しない古い古い物語を互いに囁き交わしている。地中深く埋められた石棺の中で眠れぬ死者達がするよう。

星々の話聲さえ聞こえてきそうな森閑とした静けさの中で、嗟嘆は顫音を引く。哀しげなヴィオロンのように。

青年は口もとを片方の掌で押さえながら、湧きあがる鳴咽を必死にこらえ泣いているのであった。この青年がもしも人魚であつたなら、その涙は眩しく白い真珠となつて黒々と静まり返る夜の内部（なか）を照らしただろう。

長身細身。濃い頬髭が、鼻梁のしつかりした西欧風の顔立ちによく似合っている。

青年の名前は天野優一。古典的かつ繊細な画風で、ちょうど人気が始始めたばかりの駆け出しの絵描きである。しかし、かつてシメオン・ソロモンがそうであつたように、彼もまた、同性愛の露見によつて画壇から引きずり降ろされた不運な天才の一人だつた。それは、大きな賞の受賞を目前にしての出来事であつた。恋人だつた少年は火の粉が飛んでくるのを恐れ、慰めの言葉の一つも無く早々に彼のもとを去つて

行つた。恋人の消息を追うともなく、突然アパートの部屋を飛び出した青年は、あてどなくただひたすらに歩いた。

両側に建ち並ぶ西欧風の瀟洒な家々は地面に影を黒鳥の翼と伸ばし、家人を飲み込んだまま眠りの深淵へと飛翔している。羽ばたきの音も無く、夢の響もただよわずに。

静寂が君臨する中を青年の靴音だけが躊躇と響いてゆく。夜風が首筋をかすめて通ると、青年からは仄かに油絵具の匂いがした。

青年は同性愛を非難されることにまったく納得がいかなかった。魂に性別などないはずなのに肉体という牢獄に繋がれたとたんに容赦なく男か女、どちらかであることを強要される。ポツティチエリの天使に、フラ・アンジェリコの天使に、性別などあるものか。人間はその昔アンドロギュヌスであったじゃないか。青年は哀しみと怒りのあまり裁判を起こそうかとも考えた、実際、賛同してくれる友達もいないわけではなかった。しかし、オスカ・ワイルドの二の舞になるだけだと思つて厭世感が増し、もう何も言う気にならなかつた。

青年は何週間もアトリエにこもりきりで、絵を描くでもなしにイーゼルの前に座り続けた。ウイスキーのボトルを片手に。何も食わず、血を吐くまで飲んだ。しかし、今日の夕陽があまりに薔薇色に美しく、それはかつて恋人であった少年と初めて出逢つたときの夕陽によく似ていて、アトリエでの愛の日々を思い起こさせ堪らなくなり部屋を飛び出したのだつた。ワイングラスにも、ベッドにも、寝椅子にも、本にも

何もかもに、あまりにも思い出が染みついている。かつては甘い薔薇の響がしたがそれが、今やまるで乾いて黒ずんだ血のように。

行くあてなどない。この先自分を抱き締めてくれる者があるとしたら、それは死だろう。

青年は最早この世に絶望していた。愛などないと、今ならそう断言できる。しかし、妙なもので愛を信じないといながらも、そう言つてしまふ自分がとても哀しかった。本当は愛にこそ縋りたいのだ。失つてしまつた愛にこそ。

涙をのみ込み、嗚咽を嘔み殺して、ようやく青年は足をとめた。体は小刻みに震えている。既に月は顔を隠し、星だけが煌やかである。辺りを見回すと普段は住人のいない大きな屋敷ばかりの別荘地にまで来ていた。

青年は力が抜けたように地面に膝をついて、さめざめと泣いた。迷子になつた小さな子供がするように。聲をあげ、涙の泉に溺れそうなほど泣いていると、ふと、一軒の館の窓から視線を感じ、青年はハツとして泣くのをやめた。涙をいっぱい溜めた瞳で振り返ると、さほど大きくはない白い館が目に入った。小さな前庭は二期咲きの可憐な薔薇、秋に咲く小ぶりの薔薇達で溢れかえつていた。鼻先に触れる強いミルラの響。夜風に響る美麗なダマスク響。青年は繚乱に縛れあう薔薇たちに呼ばれるように立ち上がり、思わずその館に歩み寄つた。風に揺られる一輪の薔薇、深紅に揺れるセレナーデが、まるで手招きをしているようで。近づいて見ると、

小体な庭はまるでラファエル前派の絵。じつとりと甘い、薔薇の馨気。夜風がそつと涙を拭く。

典雅な朱赤で入り口に広がるのは原種に近い平咲きのガリカ系、ロサ・ガリカベルシコール。様々な種が庭じゅうに競いあうように咲いている。

官能的なヴァイオレット・ピンクが何とも言えず気高いのはスヴニール・ドウ・ラ・マルメゾンだろう。

幾重にも重なる花卉が優雅で古典絵画的な、淡いピンクのフェリシテ・パルマンティエ。その美貌は廃園にこそ相応しい。もつともその馨の甘やかさと佇まいの優美は、バーンジョーンズの絵の中の女神が指先に持つのに不足がない。薄紫のブルームーンは青薔薇の元祖で、隣咲く乙女の頬という名のメイドウンス・ブラッッシュの淡いピンクと良く調和している。

庭の奥に群咲く、クリーム色がかつた白のネジュ・パルファンは、馨る雪という名に相応しく優しい芳馨を夜風に運ばせている。

しかし何といつても白薔薇の王様はフラウカール・ドルシュキーだろう。白系蔓バラの最高品種で2002年に発表されて100年以上愛されてきた。またとないという意味でかつては「不二」と呼ばれ親しまれてきた薔薇がここでは強靱な蔓を異様なまでに錯綜させながら見事なアーチを成している。可憐な花と、獐猛な蔓。

セレナーデ、ロサ・ガリカベルシコール、スヴニール・ド

ウ・ラ・マルメゾン、フェリシテ・パルマンティエ、ブルームーン、メイドウンス・ブラッッシュ、ネジュ・パルファン、フラウカール・ドルシュキー……。青年は呪文のように薔薇の名前を小さな聲で何度も繰り返した。

聖なるような、魔のような、慈愛に満ちた天使のような、甘い囁きでしきりと林檎を齧ることをすすめる悪魔のような。月光に赤く潤んだ花卉の、茎の、葉の、棘の、並ならぬ美貌。残酷で冷たく、誰よりも優しい誘惑者たち。

青年は薔薇に強く惹きつけられた。かといつてかつてのように憧れの対象をすぐさまキャンバスに封じ込めたいという欲求は皆無で、絵筆も捨てて、現も捨てて、ただ、彼女たちを眺めていらればよかった。

いつそ詩人のリルケのように薔薇の棘に刺され死んでいけたらと、未だ思考の果てにあるものは自らの死でしかなかった。青年の唇は死妖精（バンシー）の苦い接吻（くちづけ）を待ちわびているのだ。

その時、また背中に視線を感じた。どうやらこの館の二階の窓から誰かが青年を見ているらしい。青年は白薔薇のアーチをくぐり右側へと進むと、二階の窓の下に立った。窓には蔦が絡みつき古色蒼然とした額縁のようだ。見上げると、赤い天鵝絨のカーテンがほんの少しだけ開いていて、白いシャツにグレイの半ズボン姿の少年が外を見ていた。年の頃は十四、五歳だろうか？ 視線は宙空に向けられ、星を眺めているようだった。いや、もしかするとじつと耳を澄まして星の

聲に聞き入っているのかもしれない。真下に佇む青年には一向に気が付いていない様子だ。青年はドキリとした。少年の色の白さと一切の俗っぽさが排除された、ひたすら高貴な顔立ちに。

ポツティエリ描くところの天使、マニフィカトの聖母の天使。そういう形容こそが彼にはしっくりくる。もしくは薔薇の精。その気高さに聲をかけるのは到底ためらわれた。それに星に夢中な様子の彼を驚かせたくはなかった。額にかかると星の前髪、物思うように閉じられた唇は五月の盛りの薔薇園の瑞々しい花卉の色。星の光を映すように潤んだ鶯色の瞳は吹き硝子でつくられたジュモアの人形の眼のように神々しい。神さびた美貌。淡い薔薇色を宿した象牙の頬が今にもこちらへ向けられそうで青年は俄かに恥じらいを感じた。戀人の手酷い裏切りによつて叩き落とされていた絶望の谷底にふいにさすそれは一筋の光のようであった。予想だにしない美の不意打ちにあつて混乱した青年は、後ずさるように窓の下を離れ館に背を向け歩き出した。自分のアトリエに向かつて。明日もう一度、ここが一体どこなのかを確かめようと。

## (一)

シーズンオフの別荘地は閑散としていて人気もなく立ち並ぶ館はどれも大きな霊廟のようだ。一夜明けると青年は定められていた運命のように再び白い館を訪れた。白昼堂々、少年を訪ねて。

風が薔薇が騒いだつ前庭をぬけ玄関に立つと表札には「篠田」とあつた。インターホンを押しても返事はなく、人の気配も無い。青年は昨夜したように右へ回り込んで二階の窓の下に立つた。見上げると昨夜と同じ場所に彼が居た。日の光を浴びた白い顔は、相変わらず美しくも、どこか寂しげだった。宙をたゆたうような、現実とは別の世界を見ているような不思議な眼差しはまるで……。

「坊ちやまの館へようこそ。」

不意に真後ろから聲を掛けられ青年は驚いて体ごと振り返つた。そこに立つていたのは、ジャケットもシャツもズボンも靴も全て白づくめの五十がらみの男だった。

剃髪された頭には白いハンチングが乗つかつていて。その異様な感じは「死体処理人」という以外に形容のしようがなかった。青年が黙っていると男は続けた。

「私は、いわば掃除屋かな。篠田家の縁筋にあたる者でこの館の管理を任されている者です。あなたは、たいそう薔薇がお好きなようにお見受け致しますが、薔薇は美しいだけに魔性です。お気をつけなさい。」

さらに男は何故か憐れむかのように続けた。

「坊ちやまのことがたいそう気に掛かられていらつしやるようですね。」

男の口調は酷く優しくかつた。

先に立ち玄関へ行くと男は青年を手招いた。

「どうぞ御遠慮なく。二階におあがり下さい。坊ちやまもそ

れを待ち望んでいらつしやつたでしょうから。」

謎のような言葉に押されて館に入ると微かに埃っぽい匂い、置き去りにされた物特有の哀しげな匂いがする。これは、古い思い出の匂いなのだろうか。饅えた追憶が放つ匂い。どの部屋を見渡しても豪華な家具をそのままに、机の上には読みかけの本すら伏せてある。時間が突然止まってしまったような奇妙な印象を受ける。思いきつてキツチンに足を踏み入れたなら、ダイニングテーブルの上にはサンドイッチやスコーンや紅茶が湯気を立てているかもしれない。しかし、きつとそれらも写真で切り取られたように停止している。だとしたら、時間を止めたのは一体誰なのであるうか。

「こちらですよ。」

男は二階へ登る階段の上から青年を呼んだ。薄桃色の絨毯を黒い革のブーツで踏みながら男の後に続いて二階へあがると、一枚の扉に突き当たった。どうやらここがああ少年の部屋らしい。扉が開けられ、まず眼に飛び込んできたのは両方の壁側の棚にぎつしりと並んで座っている古めかしいアンティーク・ドール達だった。夥しい数の人形たちは、侵入者を警戒し皆一斉にこちらを見ているようだった。居並ぶ人形たちはどれもコレクターが羨むような希少でとびきり麗しいものばかり。古い人形には、不思議な存在感がある。生まれ時代の雰囲気とその表情ひとつに凝縮され、はつきりと自己主張しているのだ。

人形はジュモーに始まりジュモーに終わるといわれるくらいで、ビスクドールの花と呼ぶべきフランスのベベ・ジュモー。艶やかな長い睫毛と微笑んだ口もとに、幼子（おきなご）のような、普遍的な愛らしさと優しさとが漂う。

ブリュジュンの、凜とした表情の中に、つき出し気味の口もとが何とも可愛らしい。

なかでも最も神秘的な表情をしているのはジュモートウリストだろう。トウリストとは「哀しげな」の意である。別名は「ロングフェイスジュモー」という。丸く広めにオレンジの頬紅を刷いたあどけない頬がルドウーテの描く薔薇のように可憐である。

少し濃いめの眉、明るい表情。安定したボディの人形はテートジュモーだろうか。

大きく見開いた目が古き良き時代を語るかのようなエミールジュモー。面長の輪郭が特徴のベベルブル。静かに微笑み続けているような、控えめな可愛らしさが魅力のアーテ。元時計職人、ステネールの創る人形は様々なタイプがあり、あつさりと描いた顔があどけないAタイプ、はつきりとした眉に大人っぽい雰囲気が漂うフェニックス。

コレクターから世界で一番美しいといわれているアッシュユ。作者は謎である。

黒々としたまつげと太い眉。豊かな頬と透きとおるような白い肌が特徴のゴージェ。

どの子もこの子もシルクサテンやシルクジャガード、シ

ルクタフタのドレスを瀟洒に着こなし、襟元や袖口から仏蘭西のリバーレースを溢れかえらせている。中にはミンクに縁取られたケープをつけ同じくミンクのマフに小さな手を入れた、いちだんと豪華な装いの令嬢も居る。クロシエ編みの靴下に小さなメリージェーンを履いた昼間は寡黙で大人しやかでありながら、実はおてんばなアリス達。きつと夜になり人形達だけの御茶会が始まるのをじつと待っているのだろう。利発な少女達、頭の良いアリス達は人前では決して口を開かない。人形とは「沈黙」である。「沈黙」を選らばざるをえないこと。こうした「沈黙」の運命の堪え難い重みを、微笑みと静かな眼差しによって担おうとする精神を、いつたい誰が美しくないなどと言えるのか。

「御覧になつてゐるそれはドイツのアルマン・マルセイユ社製のもので、顔は薔薇色に焼かれた、さわればやわらかくへこみそうな磁器で、とうていガラスとは思えない目は深く澄んで、ほんのり開けられた唇から信じられない小ささで歯がのぞいています。」

驚かれたでしょう。この子達は皆、病気がちで学校にもあまり行けなかつた坊ちゃんの遊び相手、いえ、話し相手といたつたところでしょうか。坊ちゃんはこの子達によく本を読み聞かせていました。今でも度々思い出すその和やかな光景は誠に優美でおくゆかしく、若きドジソンと大勢のアリス達といった趣がありました。坊ちゃんが語り始めるとこの部屋はピクニックの際の湖をゆく小舟になるのです。」

少年のことを男が突然過去形で語り始めたことは驚きであり、同時にそれは庭で薔薇の馨をふかぶかと吸い込んだ時から無意識の底で予感されていたことでもあつた。青年の中で夢と現の境が融解し、何ともいへぬ甘美な感情が青年の全身を貫いた。男は愛おしそうに人形達を見ながら青年に話しかけた。そして、ゆつくりと部屋奥へと入つていく。青年は催眠術にでもかかつたように黙つて後ろに従つた。肩幅の狭い華奢な背中が眼に入る。彼だ。まぎれもなく彼がそこに居るのだ。男は立ち止まると白いシャツの後姿に向かつて帽子を取りうやうやく挨拶をした。

「こんにちは、坊ちゃん。御望みの通り、お友達が御見えますよ。」

少年の白皙の項が今にも振り返りそうであるが、微動だにする気配もない。男はやおら少年を抱きあげると、机の傍らにある椅子に掛けさせた。グレイの靴下に紺の靴下どめをつけた両脚が宙で微かに揺れる。しどけなく凭れかかつた男の肩に触れる、亜麻色の髪。

そこにはまぎれもなく、血の通つた生々しい官能があつた。青年は己の内で肉欲（ヴォリユプテ）の黒い薔薇が、鋭い棘を誇る黒い薔薇が、急激に蕾を膨らませるのを感じた。咲いてはいけない、禁断の薔薇。花弁から滴り落ちる濃い闇は決まつて人を盲目にする。しかし神の御手はあまりに遠く、彼の魂は救いがたく、青年はすでに、戀する虜。少年に対する熱烈な戀の情は、はたして邪戀か聖なる戀か。

机の上には、少年の肖像写真が一枚、額に入れて飾られている。その写真の幾分哀しげな少年の瞳をじつと見詰めていると、男は話し始めた。

「彼の名前は篠田龍彦。元來病弱で十四歳で夭折しています。」

「えっ、ということでは……。」

青年は困惑して何かを云いかけたがすぐさま全てを了解して頷いた。

「病氣だったのですか？」

男は頭を横に振りながら俄かに寂しい眼をした。

「いいえ、そうではありません。彼の死は全く不可解な、妙なものです。この人形のせいだとも言えましょう。正に『テレーズ我を殺せり』の世界ですね。」

小栗虫太郎の「黒死館殺人事件」の一節を口にし長い溜息をつくくと、男は語り部のような調子で続けた。

「坊ちゃんは美しく頭もよく、両親に溺愛されて育ちました。誰に対しても驕り高ぶることのない優しい性格の少年でした。幼いころから人形が大好きで、自分も人形になりたいと常々口にしていたくらいでした。彼の十四歳の誕生日に、両親の計らいで一人の人形師がこの家に招かれました。坊ちゃんをモデルに人形をつくるということでした。その計画を聞いた私は、強く反対しました。理由は解りませんが、酷い胸騒ぎを感じたからです。しかし、坊ちゃんはいそいそ喜んでこの誕生日プレゼントを受け入れました。喜々としている坊ちゃん

んを見て、両親はさぞかし喜んだことでしょう。

しかし、人形の完成が近付くにつれて坊ちゃんの体は段々と衰弱していききました。

両親は私の忠告を思い出し製作を止めるように人形師に頼みこみました。すると坊ちゃんがベッドの上から人形の製作を続けることを懇願しました。人形師は坊ちゃんの必死な様子に心を打たれ完成させることを約束したのです。それから二日後、ついに人形が出来上がりました。その瞬間、坊ちゃんは人形師の腕の中で倒れました。それきりです……」

話を聞いていて青年は即座にボオの「楳岡の肖像」を思い出した。

男は青年の方を一瞥すると淡々と話し続けた。

「両親は哀しみのあまり、思い出多いこの館を家具もそのままに、すぐに離れ、都心に引越していったのです。坊ちゃんを持ち物の一切は、見るのも辛いからと、そのままここに残されました。その結果、人形達はこの館に幽閉されることになったのです。まるで時空を漂う幽霊船のようなこの館に。」

青年は心が痺れる思いで、眩暈を感じながら男の話に聞き入っていた。人形になった少年とは何と甘美な物語だろう。でも、彼と語り合えないことが酷く残念に思われてならない。少年の魂は果たして人形の中にあるのか。青年は無意識のうちに、いつしか人形の頭をそつと撫でていた。兄が弟にするように。男はその時、何事かを見極めるようにして青年をみつめていた。そしてポケットから鍵を取りだすとつかつかと

歩み寄り差出した。そして驚く青年をよそここう言った。

「この館のスペアキーを貴方に渡しておきます。坊ちゃん寂しがらないように遊びに来てやって下さい。」

青年は鍵を受け取るとすぐに革ジャンのポケットにしまひ込んだ。美しい少年に毎日でも逢いにこれる。青年は久しぶりに微笑した。その頬はこの世ならぬ戀のために十七歳の乙女のように紅潮していた。男が話し始めた。

「人形達にとつても、蓄微達にとつても、ここは流刑地なのかもしれない。そして、あなたも流されてきた。」

男の眼は相変わらず優しい光をたたえていたが、急に堅い表情を浮かべ、青年に極めて不可解な忠告をした。

「いいですか、一つだけしてはいけないことがあります。貴方の命にかかわることです、真剣に御聞きなさい。裏庭へは決して足を踏み入れないこと。特に雨の日は。」

青年は男の厳しい聲におされ訝りつつも素直に約束を受け入れた。裏庭には一体何があるというのだろう。好奇心の蛇が青年の耳たぶをチロチロと執拗に舐め始めたが、頭を振り妙な考えを諫めた。しかし、誘惑の蛇は案外手強かった。すべらかな蛇身は音も立てずそつと青年の心臓に巻き付いた。彼もまだ気づかぬうちに。

男はクローゼットから少年の着替えを一揃え取り出した。真白なセーラー襟のブルーグレイのシャツ、紺色の半ズボン、白い靴下に下着。

「着たきり雀では可哀相ですからね。私はここへ来るたびに、こうやって着替えをさせるのです。」言いながら男は少年人形を、龍彦を抱えてベッドへ連れてゆき、何のためらいもなく服を脱がせ始めた。脱がされたシャツの下からは白い腕が現れ、下着を取ると葡萄色の小さな乳首が露わになった。腋下の窪みが生々しい。ベッドの上に投げ出されるしなやかな球体間接の腕。されるがままの形の良い両脚。枕の上に乱れる髪。青年の心は騒ついた。滑らかな膚が醸し出すこの世ならぬ艶めかしさに。そして何よりも透明で澄みきつた少年特有のエロティシズムに。少年期のエロティシズムは青い林檎のように仄かに響り、そしてたまらなく爽やかで清々しい。

男はかまわずトランクスを脱がせ少年を完全な裸にした。薄いヘアに可愛らしいクロッカスの蕾。臀部は引き締まって小ぶりながら美しい曲線を描いている。その肉感、白さ、透明感に青年は思わず息をのみ強い酒をあおった如くに酷く酔酩した。直視するのに恥じらいながらも、唇の端には無意識にせよ男色が寝室で浮かべる、あの、肉欲（ヴォリュプテ）の黒い微笑が刻まれている。青年は人形の裸体に強く鋭い欲情を覚えた。若く、初々しく、鞭のようにしなる裸。幅の狭い背中には天使の羽根さえ生えていそうだ。

男のなすがままになりながら、少年人形は恥ずかしがるわけでもなく、むしろ微笑しているようにすら見えた。それは愁いを含んだ、うら若い男娼の微笑みだった。青年はドキリとした。一瞬、人形が艶めいた視線でこちらをじっと見詰め



ているように思えたからだ。まるで意図して美しい裸体を見せつけたがつているかのように。

人形には魂が宿るといふ。だとしたら眼の前に居るのは龍彦という一体の少年人形ではなく、龍彦という一人の少年そのものなのだろうか？

「どうです、ギムナジウムの夏休みといったところでしよう。」着替えを終わらせると男は満足そうに言った。男の言葉にハッと我に返った青年は、ベッドに横たわる少年人形をまじまじと眺めた。なるほど、真白なセーラー襟と裾に金釦の付いた紺色の半ズボンとの色彩の妙がいかにも清潔で制服と呼ぶに相応しい。膝にはほんのり紅がさして可愛らしい事この上ない。おそらく龍彦を創った人形師も少年愛を知る人だったのだろう。所々に少年の特権というべき淫らで潔癖なエロティシズムを感じさせる要素が付け加えられている。例えば頬、例えば唇、例えば背中、例えば臀部。十四歳の少年の美とはまるで薔薇と象牙で出来ているようだ。見る者の心を蕩かす蠱惑の眼（まみ）と。

「どうです、あなたの手でこの子に靴下を履かせてやつてくれませんか？」

男は龍彦を起こしベッドに腰掛けさせると青年に言った。青年は龍彦の前に歩み寄ると跪いて、それが神聖な儀式でもあるかのように、何のためらいもなく少年の足の甲に接吻した。シートと絨毯しか踏んだことのない土を知らない小さな足に、青年は丁寧な靴下を履かせていく。まるで絶対の服従

を誓うように。龍彦は青年をあらがいがたい鳶色の瞳で見下ろしていた。服従の誓いに片頬笑む幼い皇帝のように。もしくは珍らかな蝶を捕まえて、標本箱に入れ、ピンを刺す夏休みの無邪気な少年のように。

### (三)

二、三日が経ち、青年は無性に龍彦に逢いたくなくなり白い館へと出掛けた。逢瀬のつもりで薔薇の花束を、選りすぐりのセレナーデの束を抱え、白のスーツでめかしこんで。

気がふれたと、人に思われるならそれでも構わない。いや、そもそも戀人の手酷い裏切りにあつて以来とつくに気はふれている。青年は魂の底から人形に戀をしたのだ。決して成就することのない破滅の戀に、真正の戀に。命さえ捧げると誓える程に。

青年は途中久し振りに三越に行き、焼き菓子だのケーキだのチョコレートだのを買いこんだ。むろん龍彦のためである。それからフォートナムメイソンに寄り、甘いものと相性の良いセイロン・オレンジペコのティーパックを買うと、いそいそと龍彦のもとに向かった。

昼間の別荘地はやはり森閑と静寂が轟き渡り、どの館も豪勢な墓石めいて、気ままな午睡にまどろんでいる。白い館からは薔薇がしきりと馨り、沈黙のうちに青年を呼んでいるかのように。噓せ返る薔薇の馨。甘美な眩暈。微かな眩きを感じながら青年は白い館の鍵を挿した。扉を開けて館の中に入る

瞬間、青年はジャン・コクトーの「オルフェ」のように鏡の中に入って行く心持がした。幾重にも無限に交錯するピラネージの牢獄の絵を彷彿とさせる出口の無い鏡の迷宮に。

青年は常々、煩瑣な大人社会から逃れ十四歳の少年に戻りたいと真摯に思っていた。龍彦に並ならぬ愛情を抱くのは、もしかしたら強い羨望と根深いナルシズムとがその根底にあるのかもしれない。ナルシズムと幼児退行の夢。自分という迷宮の中心には、きつとこの二つの美しい怪物が双子の薔薇のように居並んで今や遅しと自分を待ち受けているのだろう。だとしたらアリアドネーの糸を自ら手離して、永遠に迷宮を出ようとはすまい。むしろ優しい怪物達に食り喰われることを強く望むだろう。青頭巾の僧と美童のように。それが地上では頹廢の刻印を押されるような行為であつたとしてもかまわない。ナルシズムに殉ずるといふのもまた一つのゆるぎない美学だ。

青年は厳かに二階への階段を昇つた。一步一步、儀式のようにゆつくりと踏みしめ、まるで迷宮の中心に向かうかのようにして。

扉を開けると一瞬にして薔薇の馨が小さな部屋を満たした。セレナーデの花束一つで子供部屋はたちまち五月の盛りの薔薇園と化する。ピスクドール達は今日も饒舌な沈黙をもつて青年を迎え入れる。頻りに鳴いている虎鶉（とらつづみ）の聲を聞きながら青年は龍彦の居る窓辺に向かった。真後ろまで進み、長年の友にするような親しみを込めて華奢な肩にそつ

と手を置く。端正な横顔を見せながら今にも振り返りそうな生々しく白い頬に青年は軽く接吻をした。この世ならぬ戀への熱情が黒い炎となつて青年の心臓を焼き尽くす。馨を届けるようにして龍彦にセレナーデの花束を差出してから、ベッドの上に置いた。

フィナンシエ、クグロフ、マドレーヌ……。青年は努めて冷静を装い露台（バルコン）に在るテーブルの上に様々な菓子子を丁寧になべた。

そして龍彦を抱え上げると露台の椅子にそつと腰掛けさせ、自分は紅茶を淹れに階下へと降りて行つた。

間もなくしてマイセンの白磁のティーカップを手にして戻ると豊かに馨立つ紅茶を龍彦の前とその向かい側に置き自分も深く椅子に掛けた。

真正面から眺める龍彦の美貌はまさにバーンジョーンズの絵画そのものだった。瑞々しく蠱惑的な唇は、接吻で熟した果実である。鳶色の瞳は艶やかに潤み、見る者を呪術的に惹きつけてやまない。頸筋は白く、頬は薔薇。指はピアノを弾きそうに長く細くしなやかである。青年は龍彦の手首を優しく掴み、その指を自分の唇に添わせた。冷たい官能が鋭く四肢を貫く。青年の息は荒く、手首を持つ手に一瞬力が入る。触れることのできる白昼夢。眼を開けたままで見る夢が青年の魂さえも甘やかに蕩かしてゆく瞬間、世界は風ぎ、時間は止まる。エロスとタナトス。官能の遊戯の只中では青年はまるで死者のように逆さに時を刻んでゆく。これは少年同士の

甘美な遊戯だ。心の中で青年はそう呟いた。

いきなり龍彦を抱きあげると唇に接吻を浴びせながら、青年は人形をベッドへと連れて行つた。カーテンを閉め切つた部屋には鏡花が好んだ木の下闇の如くに真昼の優しい薄闇が満ちている。青年の力強い手が龍彦の上半身を素早く裸にした。膚の白さが闇に冴える。それが、青年の肉欲(ヴォリユプテ)に火をつけた。肩を撫で、背中を抱きしめる穏やかな愛撫は徐々に激しさを増してゆき、半ズボンを引き裂き、下着を剥ぎ取ると小さな雄蕊にむしゃぶりついた。枕に頭頂部を押されるような態勢になつた龍彦は、まるで鋭い快樂に堪えかねて背中を仰げ反らせているようにさえ見える。官能がスピードを増してゆく。上になり下になり、跨り、のしかかり、獐猛な愛撫が続く。されるがままのしなやかな肢体。うつ伏せになつた龍彦の丸い臀部に頬を擦りつけながら、青年は強烈な戀の美酒に酔つた。

(四)

朝比奈翔は久しぶりに優一のアトリエの入口に立つた。穏やかに晴れ渡つた夕映えに、自慢の金髪がゼウスが降らす金貨のように煌めいて、その極めて絵画的な美貌をいつそう官能的にひきたてている。彼には常々絶対的な自信があつた。全ての男は自分の奴隷だと云う自信が。優一もいままでの例と同じく自分を求めて今頃は半狂乱になつてゐるだらうという自尊心をくすぐる兇暴で驕慢な確信。

僕は累々たる男達の屍の上に坐するスフィンクスで、そしてオイディプスは永遠に現れやしない……翔はまだ幼いころから自分の美貌が男色家達を狂わすことを熟知していた。年上の男達に崇拜され甘やかされる度に、彼の美はいつそう鋭く磨かれていった。実際、緑色の愛の信奉者が入りする酒場「ベラム」でも彼の美貌を越える者は皆無であつた。優一と初めて会つたのもその店である。優一は翔の中に内在する悪の部分に強く惹かれた。やがて手酷く裏切られるであろうことへの甘美な誘惑が、優一の心の内側で蛇様の首をもたげた。そして残酷な運命の女神が投げてよこした禁断の林檎を優一は、我を忘れて貪婪に貪り喰つた。自慢の尻尾で優一の身体に軽打を加えるこの邪な黒猫のような少年に首輪をつけて長く手元に置くのは不可能だ、と薄々予感しながら。優一にとつて翔は、棘の鋭いめづらかな大輪の薔薇であつた。

アトリエの扉を叩けども返事がない。きつと幾日もベッドで歎き伏せてゐるのだから。

翔はそう考えると自分の影響力の甚大さにぞくぞくした。鍵は掛かつておらず、少し押しただけで簡単に扉は開いた。若干の後ろめたさを感じ進軍する兵士のような素早さでアトリエに入ると、翔は愕然とした。所狭しと並べられた大小のキャンバスに描かれているのは自分ではない、何れも同じ少年の肖像であつた。翔は酷く自尊心を傷つけられた思いがして、俄かに強い怒りが沸き起こるのを感じた。咄嗟に眼前の絵を乱暴に掴みこよう云いかけた。

「おまえは誰だ……」

アトリエでの聲にきづき、優一が奥から姿を現した。翔は走って行き、優一に甘えるように抱きついた。

「ねえ、僕が帰って来たのよ。酷いじゃない。もう新しい恋人をつくるだなんて。」

優一は静かに身を離しながら頬髭の奥で寂しく微笑した。そして小さな子供をあやすように云った。

「翔、もう関係は変わってしまったんだ。すまないが君を抱いてやることはできない。」

思いもよらぬ言葉を優一の口から聞き、翔はヒステリックに問い返した。

「この子、誰なの？ 僕をさしおいて恋人になるなんて許せないわ。ねえ、この子と会わせなさいよ！」

しがみついて泣いている翔をなだめるように、優一は背中を撫で続けた。しかしこうしていながらも、青年の頭の中には常に龍彦のあの愁い深い横顔があった。

折からの雨が激しさを増して窓を叩く。稲光に蒼白く浮かび上がる翔の泣き顔に龍彦の顔が重なって見え、思わず青年の腕に力が入る。しなやかな少年の肉体を膚に感じて、我を忘れて呟いた。

「龍彦、愛しているよ……。」

瞬間、翔はありつたけの力を込めて優一を突き放した。その手も髪も激しい怒りのために小刻みに震えている。青年はハッとして荒い息のまますずさま謝った。

「すまない……。」

翔が涙で濡れそぼった頬を上げ、狂ったように云い放った。「いいのよ、僕の事は。でもね、僕は僕から優一を奪ったこの子が許せない。こんなもの、こうしてやるわ！」

云い終わると同時に、翔はテーブルの上にあった鉛筆を削るためのナイフを手に取りいきなりキャンバスに切り付けた。「何をするんだ、止めろ……。」

青年は翔の前に廻り込み、ナイフを持ったその手をとっておさえた。翔は細い腕で必死に抵抗する。纏れあう二人はしばらくもみあつた後バランスを崩しとうとう床の上に倒れ込んだ。翔が反射的に立ち上がる。青年は脇腹に走る痛みで顔を顰めた。倒れたままの青年を覗きこむようにしてしゃがむと、翔は鋭い悲鳴をあげた。青年の脇腹に、ナイフが深く刺さっている。パニックを起こした翔がうわごとのように繰り返す。

「こんなつもりじゃなかったのに。こんなつもりじゃ……」  
青年はやつとの思いで机の角にとりすがり立ちあがった。鮮血がぼたりぼたりと床を濡らす。震えている翔の肩にそつと手を置きつぶやいた。

「君のせいじゃない。」

そしてままならぬ手つきでポケットからようやく財布を取り出すと中から数万円を出し翔にこれを受け取って逃げろ、物取りの仕業に見せるんだと強く云い放った。

うずくまって泣きじゃくっている翔を起こし押すように

して扉の前に連れてゆく。

やがて決心したように走り出した翔の姿を遠くに見送ると、青年は再び床に倒れ込んだ。

どうしようもなく眩いた眼前に浮かぶのは、愛しい龍彦の幻ばかり。そうだ、彼に逢いに行こう。氣力をふり絞ってどうにか身を起こすと、青年は龍彦のもとに向かい蹠跟と歩みを進めた。初めて逢った漆黒の夜のように。

### (五)

外には闇が迫っていた。全てを飲み込む夜という巨大な鳥が大きな翼を広げたのだ。

勢いを増した雨が青年の髪を、身体を、傷口を濡らす。青年は傷を押さえ時折小さく呻きながら長い時間をついやして、何とか別荘地まで辿りついた。龍彦の待つ白い館まであと僅か。風に乗って鼻腔に触れる薔薇達の強いダマスク馨。青年は朦朧とする意識の中で、いつか白い男が自分にした忠告を思い出した。

裏庭には決して近づかないこと。この言葉の謎がすでに死と隣り合わせの青年を今さらながらに強く惹きつけた。そこには一体何があると云うのだろう。そうだ、今日こそそこへ行ってみよう。たとえ身に危険が及ぶとしてもかまわない。青年は何故だか爽やかに微笑した。そして長身を引き摺るようにして歩き始めた。裏庭へと向かって。

風は泣き叫び、激しい雷鳴は行くなと云う。しかし青年は

神の警告には一切耳をかきない。強い薔薇の芳香は裏庭に近づくとつれて千変万化の移ろいをみせた。甘やかな馨に白檀めいた苦みが加わり、歩みを進める度に極度に熟れすぎた果実のような重たい甘さが鼻につくようになった。ある瞬間、とうとうそれは忌まわしい腐臭へと変わり優一に顔を顰めさせた。見ると足元には匂いの出どころと見られるイタチの死骸がおちこちに散らばっている。優一は思わず顔をそむけた。死骸を除けつつ遅々として進んでゆくと、ほどなくして歪んだ木製の扉の前に立った。錠前は外れ門は既に壊れている。静まり返ったその様子は冥府への扉のようだ。痺れつつある左手で扉を押し開け、身を屈めつつ一歩踏み込んだ。顔を上げると眼前に広がるのは深紅に濡れそぼる一面の芥子の花。

死のように華やかで、迸る血のように毒々しい、赤。雨に立ち昇る瘴気が傷口から入りこみ青年のまなうらに幻影を送りこむ。ああ、龍彦が一階の大きな窓から手を振っている……

青年は穏やかに微笑み返し、歩き出した。真赤な芥子が笑っている。確か童話の歌詞にそんな言葉があったと思つたが、今正に芥子の花は高らかに笑っているのだ。それは青年にとって祝福の笑みであった。間もなく死が、青年と龍彦を結ぶのだから。

窓辺まで来ると、中から手を差し伸べる者があつた。白い男である。男は青年を背負うようにして、窓から館の中に入り入れた。勢いあまつて床に倒れた青年を素早く抱きおこす

と、憐れむような眼で脇腹の傷口を一瞥した。

「どうやらあなたには、もう時間があまりないようだ。私の勝手を言うなら今すぐ病院へ担ぎ込みたい気持ちですが、あなたはそれを望まないでしょう。だからこそここへ御越しになられたのでしょうか。それにあなたは既に芥子の花、あの赤い娘達の贄となられた。しかし、今なら龍彦坊ちゃんの声を聞き、話すことさえ叶うでしょう。さあ、行きなさい。」

その言葉に背中を後押しされるように青年は立ち上がった。白い男がさかさず肩を貸す。

二階へ続く階段の下まで来ると男は身を離し、青年を手にすりにつかまらせた。青年は壁に身を擦るようにして一歩一歩階段をのぼってゆく。気のせいか二階から小さな足音が聞こえた。ようやくのぼりきると青年の鼻先で部屋の扉は静かに開いた。龍彦だ！ 龍彦が自ら扉を開け青年を招き入れる。奇跡だ！ 優しい神の残酷な奇跡。青年は心の中で一瞬そう叫んだが、この動き語る幻は間違いなく芥子の持つ毒のせいだと確信していた。

「さあ、こつちへ来て。」

龍彦の華奢な手が、青年の手を取り部屋の奥へと向かう。両側に居並ぶ人形達は今日も相変わらずめかしこんで、二人の行くてを息を殺して見つめている。

青年は激しさを増してきた痛みに顔を蹙め、龍彦の手を取ったままよろめいた。まるで不器用なワルツだなど、青年は幸せの只中で自嘲した。

「坐つて、そして見て見て御覧。」

龍彦は青年に椅子に掛けるよう命じ、鏡を覗くようにと促した。

青年は、朦朧として来た意識の中で鏡を見た。するとそこには、十四歳くらいの少年が龍彦と共に映っている。それはまぎれもない少年時代の自分そのものであった。

「来て。」

龍彦が誘う。フワフワと宙を歩く心持で優一は云われるままにベッドへと向かった。シーツの上に身を投げ出して優一は馬乗りになった龍彦の冷たい鳶色の瞳をみつめ続けた。

「僕等二人とも悪い子だ。優しく折檻しあおうよ。」

艶めく少年、触れ合う唇、繋いだ手と手。それは少年同士だけが成し得る甘美な遊戯の始まり。龍彦の拙いけれど挑発的な接吻に、優一の体は火となった。仰向けになつたまま腕を伸ばし小鳥の胸毛のように柔らかな龍彦の髪を愛撫する。しかし、片方しか羽根の無い蝶がそう長くは飛んでいられないのと同じように、優一の肉体にもだんだんと時間が迫っていた。強烈な死の気配が、青いエロスと結びついて何とも云えない官能を引き起こす。優一は、龍彦から死に至る愛を勝ち得たのだ。龍彦は優一の頬を撫でながら優しく笑っている。

「好きだよ。もう離さないから。」

無邪気に発せられる龍彦の言葉に微笑み返した次の瞬間、優一は、動かなくなつた。

完